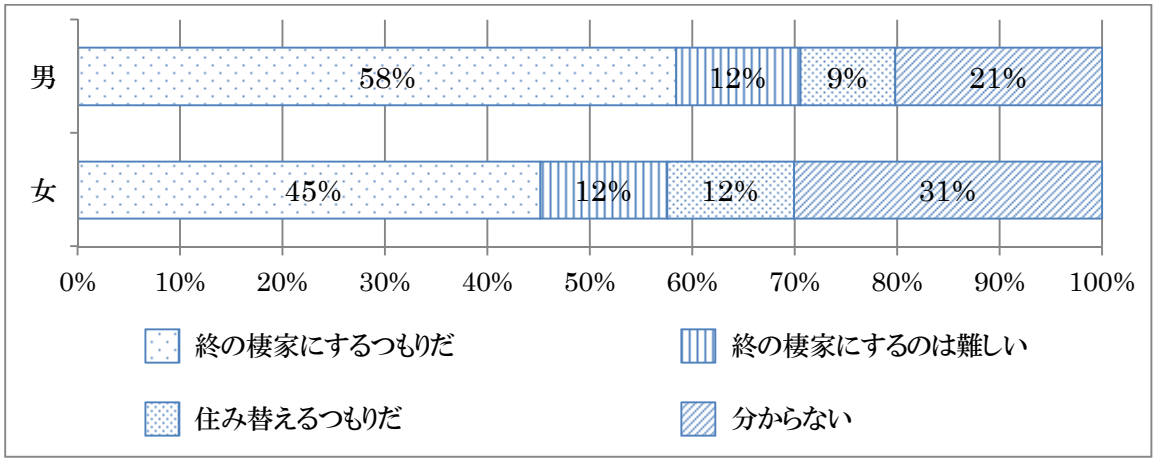
2016 年 1 月 25 日
特定非営利活動法人「老いの工学研究所」

高齢者の約半数が「住み替え予備軍」
住み替える理由は、「孤独」と「高齢期の暮らしに合わない家」
60 歳代から、将来を見越した住み替えが始まる傾向
【高齢期の住まいと住み替えに関する調査】

高齢期のライフスタイルの充実について調査・研究する、特定非営利活動法人「老いの工学研究所」（大阪市中央区、理事長：西澤一二）は、「高齢期の住まいと住み替えに関する調査」を行い、60 歳～91 歳まで 317 名から回答を得ましたので、その結果についてお知らせ致します。

【図 1】現在の住まいを“終の棲家”にする予定ですか？



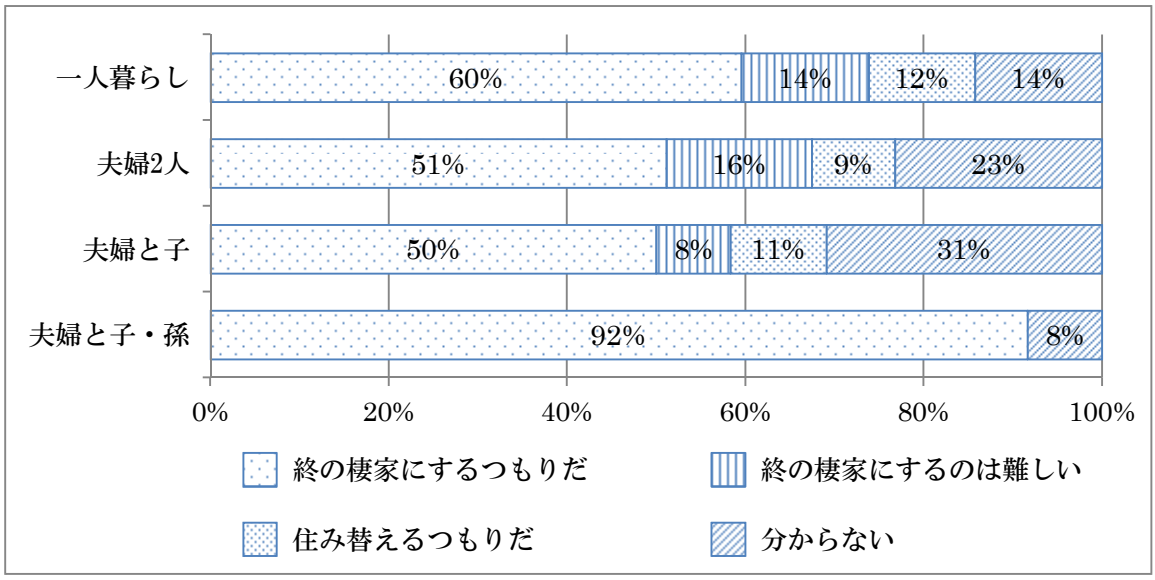
住み替えを検討している人の割合（「終の棲家にするのは難しい」「住み替えるつもりだ」の合計）は、男性で 21%、女性の 24%となりました。
「分からない」とした人を合わせると 47%（男女の合計）で、約半数が住み替える可能性があることになります。

また、「終の棲家にするのは難しい」「住み替えるつもりだ」と回答した人に、その理由を訊いたところ、次のようになりました。（複数回答可）

介護状態になったら、面倒をみてくれる人がいないから	35%
家や庭が広すぎて、掃除や管理が大変だから	34%
事故や病気の際に、気付いてくれる人がいないから	28%
屋内に階段や段差があって危険だから	23%
子供や親族に心配や迷惑をかけたくないから	20%
家が老朽化し、使いにくく、不便を感じるから	18%
子が独立し、友人なども減っていき寂しいから	9%
周辺に坂道や段差があり、歩くのがしんどいから	6%

住み替える可能性がある理由は、面倒を見てくれる人、万一の際に気付いてくれる人がいないといった「孤独への不安」と、広すぎる・老朽化・段差など「家が高齢期の暮らしに合っていないこと」の二点が大きいと考えられます。

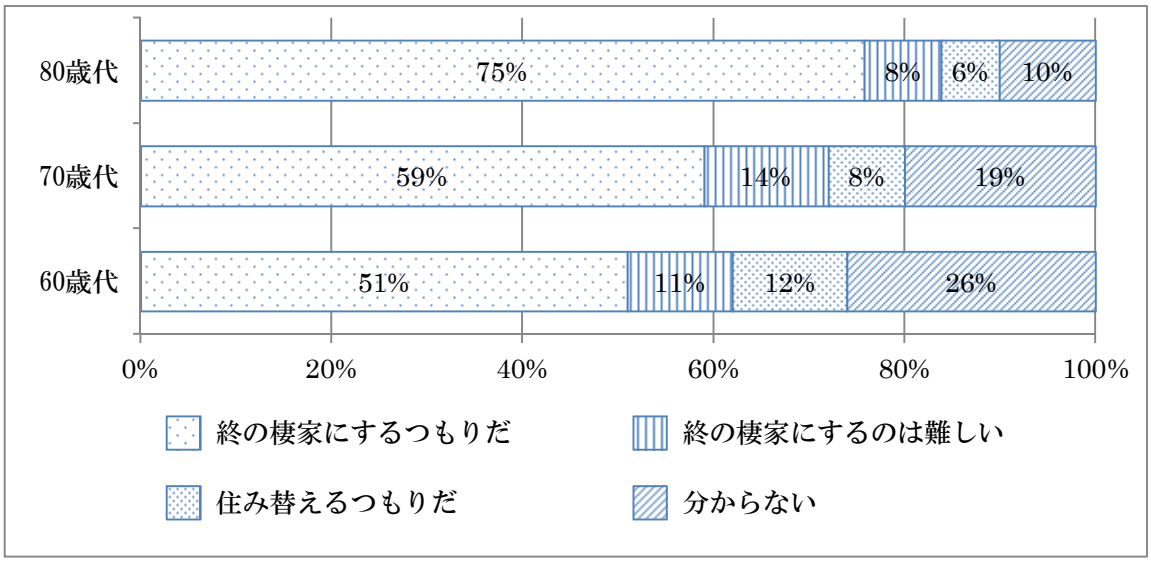
【図 2】家族構成別・住み替え意向



家族構成別に見ると、子・孫と一緒に住む「三世代同居の高齢者」の 92%が、現居を終の棲家にする予定としており、その他の家族構成に比べて突出して高くなりました。三世代の同居が、孤独を解消し、介護・病気・事故など万が一への備えにもなり、また、家の掃除や維持管理の手間を軽減している結果と考えられます。

なお、夫婦と子の世帯が夫婦 2 人世帯や一人暮らし世帯とあまり変わらなかったのは、これから子の独立などを迎えるケースも多いからではないかと思われます。

【図 3】年代別・住み替え意向



年代が上がるごとに「終の棲家にするつもりだ」と回答した割合が増加しており、60 歳代から、将来を見越した住み替えが始まっている様子が伺えます。

【調査概要】

・ 調査期間：2015 年 12 月 1 日～12 月 20 日　　・調査方法：郵送

・ 回答者

	60～69 歳	70～79 歳	80 歳～	計
男	84	78	27	189
女	67	40	21	128
計	151	118	48	317

＜お問い合せ先＞
特定非営利活動法人「老いの工学研究所」
研究員　　川口 雅裕
大阪市中央区伏見町四丁目 2 番 14 号
06-6223-0001
info@oikohken.or.jp